

(1) MSMを対象としたメンタルヘルスと性行動に関するWEB調査

- 研究分担者：生島 嗣(特定非営利活動法人ぶれいす東京)
- 研究協力者：樽井 正義(特定非営利活動法人ぶれいす東京)
三輪 岳史(特定非営利活動法人ぶれいす東京)
山口 正純(博慈会長寿リハビリセンター病院)
野坂 祐子(大阪大学)
大槻 知子(特定非営利活動法人ぶれいす東京)
若林 チヒロ(埼玉県立大学)

研究要旨

日本のMSM(男性とセックスを行う男性/Men who have Sex with Men)は一般集団と比較して薬物使用の割合が高く、また薬物使用はHIV感染リスクの高い性行動との関連が示唆されている。本研究では、MSMのメンタルヘルスと性行動に関するアンケート調査の実施に先立ち、当事者の意見を質問紙に反映させるためにMSMコミュニティへのヒアリングを中心に行った。ヒアリングの結果からは、特に、薬物使用、HIV検査行動、コンドーム使用、周囲への相談といった行動の背景にある、対人コミュニケーションのあり方、幼少期の逆境体験、自尊感情、ソーシャルサポート環境といった要因を確認する必要性が明確になった。今後は、まずヒアリングの結果を元によりMSMコミュニティの声を反映させた質問紙を作成し、オンラインアンケート調査を約1か月間に渡り実施する。そして、本調査で得られた情報を活用して「Stay Healthy and be HAPPY!」のプラットフォームをより充実させる。今後は受身的な情報発信に留まらず、地域NPO、コミュニティセンター、メディア、インフルエンサーと連携し、より幅広いMSMコミュニティにメンタルヘルスや性行動に係る役立ち情報を発信していく。

A 研究目的

日本のMSMの間では、薬物使用が重要な関心事となっている。欧米諸国の研究では、MSMは一般集団と比べて薬物使用の割合が高いことが示されている(Hunter et al. 2014; Heiligenberg et al. 2012)。2016年に実施された日本在住のMSMの薬物使用や性生活等に関する自己回答式インターネット調査(LASH: Love Life and Sexual Health)では、11.3%の回答者が過去6ヵ月以内に何らかの薬物を使用しており、彼らはそうでない回答者と比べてHIV感染リスクの高い性行動を取る傾向が示唆された(生島ら、2017)。また、薬物使用に関する相談相手となりうるのは友人やパートナーであることがHIV陽性者を対象にした調査から示されている(若林、2014)。

そこで本研究では、薬物使用やコンドーム不使用の背景にある対人コミュニケーションのあり方、幼少期の逆境体験、相談行動等を把握するため、MSMのメンタルヘルスと性行動に関するオンラインアンケート調査を実施する。本年度は、アンケート調査に先立ち、当テーマに関する最新の情報を収集し、当事者の意見を質問紙に反映させるためにMSMコミュニティへのヒアリングを中心に行った。

B 研究方法

まず、MSMの当事者を対象としたフォーカス・グループ・インタビューを複数回に分けて行った。インタビューは半構造化形式を採用し、内容は、①最近のMSMコミュニティにおける出会いの手段や変化

について、②セックス時に使う併用品について、③性の健康とメンタルヘルスについて、の3点を軸にして実施した。また、依存症を含めたメンタルヘルスやHIVについての啓発プラットフォーム「Stay Healthy and be HAPPY!」にMSM向けの新たなコンテンツを追加し、さらにクラブイベントで当プラットフォームを周知するキャンペーンを行った。

C 研究結果

3-1 MSM コミュニティへのヒアリング

以下の日程でヒアリングを実施し、合計15名のMSM（ゲイバイセクシュアル男性、トランス男性）から意見を聴取した。年代は20代が7人、30代が4人、40代が2人、50代が1人、60代が1人だった。MSMを対象にしたコミュニティセンター・スタッフ、薬物依存症施設やNPOスタッフも含まれている。

- ・2021年12月18日(土) 10:00～12:00
参加者3名
- ・2021年12月19日(日) 18:00～20:00
参加者3名
- ・2021年12月25日(土) 10:00～12:00
参加者3名
- ・2021年12月26日(日) 17:00～19:00
参加者3名
- ・2021年12月26日(日) 19:00～21:00
参加者3名

出会いの手段や変化について

出会いの手段としては、出会い系アプリよりもSNS（Twitter、Instagram等）が主流になっているという意見が多くあった（「最近は出会い系アプリよりもInstagramやTwitterで繋がることのほうが多い」）。理由としては、SNSには情報量が多いため、相性の良い相手を見つけやすいという意見が多数みられた（「Instagramは鍵アカが多いので深く親密なつながりになりやすい」「TwitterやInstagramのほうが掲載している情報量が多く、会う前から予め色々知れるので便利だと聞く」）。そのため、出会い系アプリはその場限りのセックス相手を探すツールとして（「出会い系アプリはヤリモクが多い」「出会い系アプリはセックスのためで、恋人を作るツールとして機

能していないイメージ」）、SNSはパートナーや友達募集として使い分けしているケースが多い可能性が示唆された（「出会い系アプリはセックスのためで、恋人を作るツールとして機能していないイメージ」）。また、年齢制限で出会い系アプリを使えない10代は、出会いのツールとしてよりSNSに頼っているという意見があった（「高校生は年齢制限のためアプリに登録出来ないため、Twitter等のSNSを使って交流している」）。

SNSが主流になっているという意見がある一方、掲示板の利用者も安定して存在しているという意見が多数あった（「地方だと掲示板の利用者が多い」「若い人も掲示板は使う」「掲示板で出会う人も再び増えてきている気がする」）。アプリにはない特徴を活かし、それぞれのニーズに合わせて使用しているようである（「掲示板は根強い人気があり、都会でも利用している人はいる。掲示板は身バレせずに出会えるので、パートナーがいる人には便利」）。

セックス時に使う併用品について

参加者の中で、セックスドラッグとして特に認知度が高いのはラッシュであった（「海外ではセックスの相手がラッシュを持っていることがあった」「ラッシュはよく聞く。エアダスターやビニール袋に入れて吸いながらセックスしている人もいた」「その場限りで1回だけやる相手の場合は、ラッシュを誘われる場合がある」「ラッシュを吸引している人とセックスしたことがある」）。合法で使用出来る海外に限らず、日本国内でも誘われた経験や目撃した経験がある参加者が複数いた。一方、ラッシュが規制されたことで、別のドラッグに移行している可能性も指摘された（「危険ドラッグ規制後は、覚せい剤に移行した人が8-9割で、残りの1割はMDMAやエクスタシーといったパーティードラッグに移行していると思う」「薬物の種類としては、覚せい剤、5-MeOなどが多い」）。

相手に誘われて初めて薬物を使用するという状況について、相手への好意や集団圧力が影響しているという意見が複数あった（「好意を持っている相手からだとなれない」「集団でセックスする際は、“みんな使っているよ”と同調圧力がかかることがあって怖い」）。特に年齢が若い場合、自己主張して上手く断ることに困難が伴いがちという意見があった（「若い時はNOと言えなかった。相手が自分のタイプだと相手に合わせて自分の望まない形を許容しがち」）。MSMコミュニティとの交流が盛んな人ほ

ど薬物を使用する可能性が高いと思われる一方(「人との交流が盛んな人ほどドラッグに出会う率が高くなると思う」)、依存まで進行するのは反対に人との繋がりが薄い人である可能性が示唆された(「ドラッグを使うのは人との繋がりが弱い人が多く、唯一繋がれた人間関係が薬物を使用する関係だった場合、切れにくい。孤立の問題も大きい」)。また、違法薬物以外の物質に依存している当事者がいる可能性も指摘された(「高揚感を得たり緊張を和らげるためにお酒を飲む人は多い」「若い人は市販薬に依存している人が多い気がする。項目にないと“使っていない”とされてしまう」)。

性の健康とメンタルヘルスについて

自身の性の健康やメンタルヘルスについて、家族や友人に相談出来ないという意見が多かった(「セックスや恋愛について誰にも相談していない」「ドラッグのことは特に誰かに相談しづらい」「家庭が機能不全状態だと家族にも相談できない」)。セクシュアリティを開示しなければ相談しづらいというのも原因のようだが(「セクシュアリティを開示せずに悩みを相談するのは難しい」) FtM ゲイはトランスコミュニティ内でも相談出来ないことが多い)、幼少期から慢性化している孤立感や疎外感により、誰かに相談するという行動自体が選択肢として思い浮かばない可能性も示唆された(「小学生の時に“おかま”といじめられたことがあるが、親にも相談できずに一人で我慢した」「小中高と疎外感を感じながら大人になってきた。悩みを自己開示出来ないまま大人になり、思春期の辛かった思い出が、大人になってフラッシュバックしたことがある」)。公的な相談機関は存在しても、まだ相談のハードルは高いという意見があった(「学校内の LGBT 相談窓口もあるが、入ったところを誰かに見られたらと思うと、利用は慎重になる」)。セクシュアリティに関する相談がしづらいことは、HIV の検査行動にも影響している可能性が示唆された(「そもそも LGBTQ+ の人がカミングアウトするのが難しい中、検査を受けるのは難しい」)。

尚、PrEP についての認知度は上がっているようで、利用者が身近にいるという声が多かった(「PrEP を使っている人は周りに結構いる」「PrEP を使って生でやるという声はここ 1 年くらいよく聞く」)。一方、PrEP に関する正しい知識が十分普及していないのか、“PrEP=コンドームなしのセックスが出来る”と考えている人が多い可能性が指摘された(「陽性者が“自分も PrEP をやっている”

と言って生でセックスをすることがあると聞く」「PrEP を使って生でやるという声はここ 1 年くらいよく聞く」「PrEP の普及によってコンドームの使用率が低下しているのではないかと思う」)。

その他

HIV の抗体検査を受けない理由については、様々な意見があった。感染していないという自信(「HIV になりたくないという気持ちはあっても生でやり、でも大丈夫だという気持ちがあると思う」)、現実逃避(「曖昧なままにしておきたいのだと思う」)、情報不足(「保健所で検査が行われているのを知らない場合もあると思う」)、検査の受けにくさ(「日本はシステムが整っていないので受けづらい」)等の意見が聞かれた。

一般社会での理解も遅れているという意見がある一方で(「HIV=AIDS と考えている人はまだ多い。性教育が遅れている。セックスだけでなく、ゲイそのものの理解も進んでいない」)、コミュニティの中でも HIV の話題は避けられているという意見が多数あった(「ゲイ男性は、セックスの話と HIV の話を切り離す。タブー視されている」「陽性者の知り合いがいる人が少ないのは、みんな HIV のことを話題にしないからだと思う」)。

また、本調査結果の情報発信の方法についての意見も聞かれた(「若い子はデータを見ないので、ビジュアルを工夫することが重要」「PrEP、Chemsex、U=U など情報が複雑化しているので、分かりやすく伝えることが重要」)。

3-2 「Stay Healthy and be HAPPY!」の新コンテンツ

本研究では、MSM コミュニティが友人や恋人から薬物含めたメンタルヘルスに関する相談を受けた時の情報収集ウェブサイト「Stay Healthy and be HAPPY!」(<https://stayhealthy.tokyo/>) を 2019 年度から開設している。HIV、薬物使用、自殺予防、依存症といった様々なテーマに関する情報や相談先を紹介しているが、前年度から準備していた、薬物使用やコンドーム不使用の背景にある MSM 同士のコミュニケーションに注目したコンテンツを追加した。具体的には、自身がどのようなコミュニケーションを取りがちなのか、自己理解を深めることを目的に MSM 向けのコミュニケーションタイプのチェックリストを作

成した。9つの質問に「だいたいあてはまる」「あまりあてはまらない」「わからない」のいずれかを回答すると、「いいなり・がまんタイプ」「ダメ出し・攻撃タイプ」「コミュ上手タイプ」「探索中タイプ」の4つの特徴とそれぞれのタイプへのアドバイスが表示されるようになっている。自身のコミュニケーションの特徴を知ることが、自分も相手も大事にしたアサーティブなコミュニケーションがとれるきっかけになることが期待できる。さらに、人気ユーチューバー「2すとりと」とのコラボ動画を作成し、本コンテンツをより幅広いターゲットに発信した。また、新たに依存に関する専門家の動画もインタビューしウェブサイトを追加掲載する予定である。

3-3 クラブイベントでの「Stay Healthy」周知キャンペーン

2021年12月18日(土) 16:00～20:00、MSM向けクラブイベント「VITA Holiday Party@WARP」に「Stay Healthy and be HAPPY!」のブースを出展し、性や薬物に関する情報発信を行った。来場者にwebのQRコードを記載したカードを配布し、友達から相談された時、情報を探しているときに役立つサイトのPR活動を行なった。しかし、新型コロナウイルス流行の影響で来場者の数はあまり伸びなかった。

D 考察

ヒアリングの結果からは、次回LASH調査に活用できる情報が多数得られた。まず、出会いの場が多様化していることに伴い、出会い系アプリだけでなくSNSや掲示板へもバナーを掲示することを検討する必要がある。また、追加を検討する質問項目として、①アルコールや市販薬といった合法的な依存物質の使用、②HIVをタブー視する度合い、③性の健康やメンタルヘルスについて相談しやすい窓口や場所、が挙げられる。また、薬物使用、HIV検査行動、コンドーム使用、周囲への相談といった行動の背景には対人コミュニケーションのあり方、幼少期の逆境体験、自尊心、ソーシャルサポート環境といった要因が関連している可能性も示唆された。アメリカの研究では、家庭暴力を含めた機能不全家族の中で育った人は、そうでない人と比べてより依存症やうつ病といったメン

タルヘルスの問題を抱える可能性が示唆されており(Felitti et al. 1998)、日本のMSMにおいてもそうした幼少期の逆境体験やその後の環境がどのように薬物使用に繋がっていくのか調べるのが求められる。尚、今年度はクラブイベントの協力を得て啓発を行ったが、新型コロナウイルス流行の影響で来場者数は少なかった。MSMが多く参加するイベントも重要だが、今後はインターネット上での啓発をより重視することが求められる。

E 結論

本研究では、アンケート調査に先立ち、MSMのメンタルヘルスと性行動に関する最新の情報を収集した。MSM当事者を対象としたフォーカス・グループインタビューを行ったところ、質問紙作成の際にヒントになる意見が多数得られた。特に、薬物使用、HIV検査行動、コンドーム使用、周囲への相談といった行動の背景にある、対人コミュニケーションのあり方、幼少期の逆境体験、自尊心、ソーシャルサポート環境といった要因を確認する必要性が明確になった。今後は、まずヒアリングの結果を元によりMSMコミュニティの声を反映させた質問紙を作成する。また、質問紙作成の参考にするため、海外や国内のトラウマインフォームドケア(Trauma Informed Care)に関する文献を調査する。その後、オンラインアンケート調査を約1か月間に渡り実施する。特に、新型コロナウイルス感染拡大後における、MSMの性やメンタルヘルスに関する意識や行動がどのように変化していったのかを探る。そして、本調査で得られた情報を活用して「Stay Healthy and be HAPPY!」のプラットフォームをより充実させる。更に、ぷれいす東京のボランティアスタッフの中の、何らかの依存症を経験したスタッフをリクルートし、オンライン上での情報スペースを設置予定である。受身的な情報発信に留まらず、地域NPO、コミュニティセンター、メディア、インフルエンサーと連携し、より幅広いMSMコミュニティにメンタルヘルスや性行動に係る役立ち情報を発信していく。

<参考文献>

- 1) 生島嗣、樽井正義他 . 2017. MSM の薬物使用・不使用に関わる要因の調査～男性とセックスをする男性向けの出会い系アプリ利用者の意識や行動に関する調査～厚生労働科学研究費補助金 エイズ対策研究事業 平成 29 年度総括・分担研究報告書 . 地域において HIV 陽性者等のメンタルヘルスを支援する研究 , 9-64.
- 2) 若林チヒロ、生島嗣、大槻知子 . 2014. 身近な人から薬物使用について相談されたら 厚生労働科学研究費補助金 エイズ対策政策研究事業 地域において HIV 陽性者等のメンタルヘルスを支援する研究 , 1-4.
- 3) Felitti, V. J., Anda, R. F., Nordenberg, D., Williamson, D. F., Spitz, A. M., Edwards, V., & Marks, J. S. (1998). Relationship of childhood abuse and household dysfunction to many of the leading causes of death in adults: The Adverse Childhood Experiences (ACE) Study. *American journal of preventive medicine*, 14(4), 245-258.
- 4) Heiligenberg, M., Wermeling, P.R., van Rooijen, M.S., Urbanus, A.T., Speksnijder, A.G., Heijman, T., Prins, M., Coutinho, R.A. and van der Loeff, M.F.S., 2012. Recreational drug use during sex and sexually transmitted infections among clients of a city sexually transmitted infections clinic in Amsterdam, the Netherlands. *Sexually transmitted diseases*, 39(7), pp.518-527.
- 5) Hunter, L.J., Dargan, P.I., Benzie, A., White, J.A. and Wood, D.M., 2014. Recreational drug use in men who have sex with men (MSM) attending UK sexual health services is significantly higher than in non-MSM. *Postgraduate medical journal*, 90(1061), pp.133-138.

F 研究発表

研究分担者

生島嗣

1. 論文・著書

生島嗣 . ゲイ・バイセクシュアル男性のネットワークと相談行動ー HIV・薬物使用との関連を中心に . 松本俊彦編 , 「助けて」が言えない SOS を出さない人に支援者は何ができるか . 日本評論社 . 218-230, 2019.

生島嗣 . ゲイ・バイセクシュアル男性のネットワークと相談行動ー HIV・薬物使用との関連を中心に . *こころの科学* . 202:76-80, 2018.

大槻知子 , 生島嗣 , 三輪岳史 , 池上千寿子 , 樽井正義 . ゲイ向け GPS 機能付き出会い系アプリを利用するトランスジェンダーの性の健康に関する調査 . *GID (性同一性障害)学会雑誌* . 11(1):91-95, 2018.

2. 学会発表

生島嗣、三輪岳史、大槻知子、山口正純、大木幸子、若林チヒロ、樽井正義 . HIV 検査と告知時期に関する考察ー「HIV 陽性者の健康と生活に関する全国調査」の結果からー . 日本エイズ学会、2020 年 .

生島嗣、三輪岳史、大槻知子、山口正純、大木幸子、若林チヒロ、樽井正義 . HIV 陽性と就労に関する考察ー「HIV 陽性者の健康と生活に関する全国調査」の結果からー . 日本エイズ学会、2020 年 .

生島嗣 . 地域における HIV 検査ー「HIV 陽性者の健康と生活に関する全国調査」の結果から . 日本公衆衛生学会総会、2020 年 .

Ikushima, Y. Patterns of PrEP use among men who have sex with men in Japan. *Asia Pacific AIDS & Co-infections Conference (APACC)*, 15-17 October 2020.

Miwa, T., Yamaguchi, M., Ohtsuki, T., Wakabayashi, C., Nosaka, S., Ikushima, Y. and Tarui, M. Associations of recreational drug use with HIV-related sexual risk behaviours among men who have sex with men in Japan: results from the cross-sectional LASH study (oral). *The 23rd International AIDS Conference (AIDS 2020: Virtual)*, 6-10 July 2020.

生島嗣、三輪岳史、山口正純、大槻知子、水島大輔、

岡慎一．GPS 機能付きアプリケーションを利用する MSM における PrEP の利用経験とその実態 (1)．日本エイズ学会、2019 年、熊本．

山口正純、三輪岳史、大槻知子、生島嗣、水島大輔、岡慎一．GPS 機能付きアプリケーションを利用する MSM における PrEP の利用経験と実施実態 (2)．日本エイズ学会、2019 年、熊本．

横幕能行、高橋秀人、生島嗣、伊藤公人、今橋真弓、渡邊真理子．職場における HIV 感染症 / AIDS の検査機会提供の有用性と課題．日本エイズ学会、2019 年、熊本．

Yamaguchi, M., Miwa, T., Ohtsuki, T., Ikushima, Y., Mizushima, D., and Oka, S. Change in awareness of, willingness to and utilization of PrEP over the past two years in Japan. The 10th IAS Conference on HIV Science, 21-24 July 2019, Mexico City, Mexico.

Ikushima, Y. Experiences of PLACE TOKYO: Challenges of Japan and Asia. The 5th AIDS Forum of Beijing, Hong Kong, Macau, and Taiwan, 12-13 April 2019, Taipei, Taiwan.

生島嗣、三輪岳史、野坂祐子、山口正純、大槻知子、若林チヒロ、林神奈、樽井正義．若年 MSM の薬物使用開始と相談行動の考察～ LASH (Love life And Sexual Health) 調査から．日本エイズ学会、2018 年、大阪．

山口正純、三輪岳史、大槻知子、生島嗣、樽井正義．HIRI-MSM を参考にしたわが国の MSM における HIV 感染リスクの評価—ゲイ向け GPS アプリ利用者の意識や行動に関する LASH 調査から．日本エイズ学会、2018 年、大阪．

Ohtsuki, T., Ikushima, Y., Miwa, T., Yamaguchi, M., Ikegami, C., and Tarui, M. Sexual behavior and health of transgender people who are sexually active with MSM in Japan; an online survey through gay geosocial networking mobile application, LASH study. The 22nd International AIDS Conference, 23-27 July 2018, Amsterdam, Netherlands.

大槻知子、生島嗣、三輪岳史、池上千寿子、樽井正義．ゲイ向け GPS 機能付き出会い系アプリを利用するトランスジェンダー等の性の健康に関する調査．GID

(性同一性障害)学会、2018 年、東京．

G 知的財産権の出願・登録状況 (予定を含む)

1. 特許取得

なし

2. 実用新案登録

なし

3. その他

なし